徳川實記「郷邑法度（百姓心懸）」

（徳川家の記録にみる「慶安御触書」
（一六四九年）

とくがわじつき：江戸幕府が編纂した徳川家歴代の家史。全五一六巻。一八〇九（文化六）年着手、一八四九（嘉永二）年完成。第一他家康以降第一〇代家治に至るまで、將軍ごとに、年月順に一代中の治績を細大もらさず叙述し、付録に善行美談・逸話を収録した。出典も明示されており、記載の事実は正確である。十一代家斉以後の將軍の時代の分については『続徳川實記』に続修されている（伊東多三郎、河出書房新社『日本歴史大辞典7』二二二頁より要約引用）。

史料出所：黒板勝美・国史大系編修会『徳川實記第三篇』吉川弘文館昭和五六年十一月一日五七九〜五八二頁。

なお、原書では旧字体の漢字が使用されているが、新字体で表し、ふりがなを倉橋がつけた。

慶安二年二月廿六日。この日郷邑に令せられしは。官の法律を守り。地頭。代官をおろすかにおもはず。里正。組頭をば親の「とく」にしたしむべし。里正。組頭は地頭。代官を敬重し。貢米渋滞せず。官令に背かず。小民等身の行ひ正しからんやう教ゆべし。里正。組頭の行状正しからざれば。小民を官事につかふ事あるとき。心に服せざればしたがはざるものなり。まつをのが行ひを正しくして。不便の事なからんやう心がくべし。また里正等をのが心にはざるものにも非義をいはず。私愛の者にも

依怙の沙汰せず。よく小民を哀憐し。貢賦の課に多寡なからんやうはからふべし。小民は里正組頭の申付を背くべからず。稼穡に心入て草をとり。時々鋤いるときは。稲も長じやすく実も多かるべし。はた田畝のさかひに大小豆をうへて。生業の助とすべし。朝はとくおきて耨り。昼は田圃をたがやし。晩は縄をなひ苞を綴り。何にても其わざに怠惰すべからず。酒茶を買飲べからず。邑里の家居は墻の内外に竹木をうへ。下枝をとりて薪とすべし。万の種子は秋初によき実を撰び収むべし。あしき種をまくときは。熟よろしからざれば其心すべし。年々正月十一日前に鋤の刃を磨し。鎌をもち直すべし。器械よからざれば耕耨はかどる。農家は糞灰を蓄ふる事専要なれば。厠をひろく作り。雨水いらざるやうにすべし。匹夫匹婦の小民は馬畜ふ事もならず。糞の貯もならざるものは。庭に三尺に二間ほどの穴をうがち。そのうちに塵芥を掃。道の芝草をけづり入。あるはせゝなぎの水をながしいれ。つくり肥をして田圃を養ふべし。農民は志慮うすく後の事を思はず。秋にいたり八木雑穀を妄りに妻子に喫せしむ。いつも正月二三月の心をもちて。食物を大切にすべし。雑穀専一なれば。麦。粟。稗。菜。大根。その外何にても雑穀をつくり。米を費さざるやうにすべし。饑饉の時をおもはゞ。たとひ大小豆。角豆の葉。芋の莖葉たり共。いたづらに棄るは無益の事とおもふべし。其身をばじめ子弟。奴婢にいたるまで。常はなるだけ麩飯を喫すべし。されど田圃を耕し稲をうへまた刈収め。一しほ骨折時は。食物を宜しく多く喫せしむべし。かくすれば稼穡に励精するものなり。何とかして牛馬のよきを持べし。よき牛馬ほど肥をよく踏なり。春中牛馬に飼ものは秋より貯ふべし。ま

た田圃其外肥多くするときは。収穫をのづから多きものなり。男は農業をはげみ。婦は機織に心いれ。夜までも夫妻とも家業をつとむべし。たとひ美なる妻ならんにも。夫ををろそかにし。飲食遊興に超過する者は去べし。されど子をあまた生み。あるは前に夫に功勞ある妻は各別たるべし。また醜婦たりとも。家道大切にせば去べからず。官の法度の中にも。わけて出所明かならざる処士は。郷中に住居せしめず。盜賊の党与はさらなり。官令を背く凶徒等を隠し置。他よりうたふる者ありて庁にめされ査検のうち。ながく滞留せば郷村の疲勞になるべし。また里正をはじめ富民等。一郷の者どもに恐れざるやう。事々正直にわたり。邪僻の心を持たべからず。農民衣服に布。木綿より外着すべからず。少しは商の心をもて家計の助とすべし。そは貢賦のために雑穀をうりひさぎ。或は買もとめんにも。商の心得なからん時は。人に欺かるゝものなり。家とめる者は此限りにあらず。田圃多くもたず。貧しからんもの子多くば人にあたへ。又は人の奴婢たらしめ。年中の口腹養ふべきはらかひすべし。宅地の庭を南向にして。洒掃をよくすべし。こは稲麦をこぎ。大豆をうち。あは雑穀をこなすとき。庭あしければ土砂交入て。売ときにいたり値いやしくなり費多かるべし。農業に精しき人にとひきゝ。その田圃に相応せる種を蒔べきやう年々心がくべし。卑湿に作りてよきもあり。またあしきもあるべければ。よく其利害を考るときは。下田も上田となるべし。その地によるべけれど。麦田になるべき所は。少したりとも見たて。麦田とするときは。民のため大なる益なるべし。一郷麦田を設くれば。隣郷もをのづから習ふものなり。春秋は身に灸して。疾病に冒されざるやう心がくべし。いかに業を励まんとすると

も。病に係らば稼穡を廢し。家道頽壞するものなれば。妻子等までも其こゝろせしむべし。煙草を喫む事を禁ず。こは食にもならず中々病となるものなり。そのうへ事の際をかき値直を費し。火のいましめにもかゝはり。万事に益なきものなり。貢米出す時。田畝の数によりては。一反に何ほど。総額によらば一石に何程と定めて。地頭。代官より差紙を出す。しかる時は耕業に心いれ。年穀多くは其身の利潤となり。あしければ人しらず。をのが産の損失となるべし。租税皆済の時に及び。升斗の米たらずして郷中を借れども。皆済のときは互に米乏しくかさゞれば。升斗のために。子ども又は牛馬もうられず。止を得ずして農具。衣服等をうらんとおもへば。金一分にて買し物を。わづか五六升の米にかへうるもいと益なき事なり。また衣服。調度うるべきものなき時は。高利を出して米を借るも。いよく費なる事なり。地頭。代官より割附を出さば。兼て不足ならんには。前びるにかり得て済すべし。前にかれば利足も軽く。売者も思ふごとくつらるべし。尤賦税は速に納むべし。家につみ置ば鼠もはみ。盜火その外方につけ。大なる損失あるべし。物をばよく干して米に摺べし。よくほさゞれば碎て費なり。よく心得べし。身を怠惰してその年の貢米たらず。たとへば米二俵かり得て貢賦に出し。其利息年ごとに積ば。五年に至て本利の米一五俵となる。其ときは生産を敗りて妻子を売るのが身をもうりて。子孫とも永く苦しむ事なり。この事よくおもひはかりて。所業をつとむべし。前に米二俵の時は少しき事と思へど。年々の利息累積せば。かくのごとくなりゆくべし。さてまた米二俵もとめおけばその利を加へ。十年ふれば百十七俵貯ふるにいたる。民産の利害こゝをもておしはかるべし。山かたは山のなり

はひし。浦方は漁獵して。それぞれに業をつとめ。怠らずかせぐべし。風雨また病患故障もあれば。かせぎて設けし品を猥りに費すべからず。山方。浦方には人居多ければ。はからぬかせぎも出来るものなり。山にては薪を採り。杉木をきり。木果を売買し。浦にては塩を焼。漁りしてあきなふゆへ。いつも業ありとおもひ。後のはからひもせず。得るほどの貨を日ごとに費すゆへ。饑饉の年は邑里の民よりこと更餓死するもの多しと聞ゆ。されば常に凶年の艱苦を怠(忘)るべからず。孤独の民病にふし。あるはさはる事ありて稼穡を廢するときは。同邑の者助けあひ。其田圃荒蕪せざるやうはからうべし。また孤独の民田を耕し。苗とりて。あす植んとする時に。地頭。代官又は官役につかはれ数日を歴れば。とりし苗はかれ。その外の苗もふし立て植る期を過すゆへ。其年の秋成あしくして民力疲憊に及ぶ。田植る時にかぎらず。畑も植る時時ときを失へばあし。里正。組頭その心して。かゝるをり孤独の民徭役にさゝれば。奴僕持し民とさしかへ。孤独の者を助けやるべし。匹夫匹婦の民生産ともしく。郷中のもので常々いやしめらるゝといへども。よく業をはげみ。米穀貲財を多くもたば。里正并に郷中の長をはじめよく接遇し。末座のものも上座のほせ馳走するものなり。また前には家富し者も貧しくなり。親戚をはじめ里正。組頭まで。いやしむるものなれば。なるたけ業をはげみ。身の行ひを慎むべし。一邑のうちにて稼穡に心いれ。行ひをつゝし。家富るもの一人あれば。そをまねびて郷中みなよくつとむるものなり。一郷にさる村あれば。一国みな習ふて豊になるものなり。隣国までも其風をのぞむものなり。地頭は転更する事ありといへども。農民は替る事なく。永く其地の田畝をもて便とするものな

れば。よく身をつゝし。み家産を富さば。農家の大なる利にならずや。且郷中に無頼の徒一人あれば。郷中みな風俗にうつされ。絶ず争論に及び。官の法律を犯せば。その徒を奉行所にめしつれ来るとき。このことあつかふ者の労苦はさならなり。一郷の費へ大なるべし。すべて事おこらざるやういづれも心入れべし。此事里正たる者の心であれば。よく小民を曉諭すべし。はた隣邦とむつびあひ。他領のものとも争論。訴訟などすべからず。父母に孝心深かるべし。孝の第一は其身疾病なからんやう養生し。飲酒に耽らず人と争鬪せず。身の行ひをよくし。兄を敬ひ弟をあはれみ。兄弟の中親睦なれば。父母の心ことに悦ぶものなり。此旨を守らば人倫の道にかなひ。神仏の擁護ありて。年穀熟してとりみも多かるべし。何ほど父母に孝養せんと思ふとも。貧乏にてはつかへがたければ。なるべきほど身を慎むべし。生産たらず貧窮に苦しむ時は病を発し。又心も邪になりて盗偷をなし。官法を犯し繫獄せられ。獄屋にいり重刑に処せられる。時は。父母はいく程か悲歎せざらん。其上妻子。兄弟。親戚等になげきをかけ。恥辱をとる事なれば。よく身をつゝし。家貧しからざらんやう旦暮に心がくべし。かく示せし如く。事々に心入て農をつとむべし。米。金。雑穀も貯ふる時は。屋舎。衣服。食物にいたるまで心のまゝなるべし。穀財あまた貯ふるとて。故なく地頭。代官より取あぐる事もなく。泰平の御代なれば他より掠る者もなし。然る時は子孫安く富み。饑饉の年にあふといふとも。妻子。奴婢の養育もとゞくべし。貢米さへ納むれば。農民ほど安穩なるものはあらじ。よくこれらの旨を心得て。子孫を教訓し。家業をはげむべしとなり。(條令拾遺)